

透析医のひとりごと

「瓢箪から駒・阿弥陀籤・塞翁が馬」—— 川島 周

私は高校卒業後に経済学部に進学していましたが、医学部を受け直して医者になりました。医者になってもまさか自分が透析医になるとは考えたこともありませんでしたが、本当にひよんなことからこの道に入ってしまった。結果的に非常に恵まれた人生を送ることができ、この道を選択して本当によかったと実感しております。一番大きな理由としては、自分がしたいことができるという人生をおくれたからと思っています。

その成り行きを今から説明いたします。実は、私がこの分野の勉強をするために、東京女子医大人工腎臓センターに行こうとした時に、多くの先輩方は強硬に反対してくれました。後輩のために時間を割いて「そんなおかしな医者にはなるな。」と説得してくれた先輩がうっとりしくも思えましたが、非常に強く私の気持ちに染み込んだことは間違いありません。

私はこのことにより、新たな技術を身につける道筋に立ったこと、人には自分の家族以外にも深く関わってくれる人がいるものだという人生勉強を同時に経験することができました。私を取り囲んで説得してくれた4人の先輩のうち、お二人はもうあの世に行ってしまいました。また近いうちにあの世でお会いする時は、さらりとお礼を言うつもりにはしています。しかし多分あのお二人は「え！ そんなことを言うたかいな？」と聞き返すと思います。

いずれにしても、自分が提供したい医療を患者さんに提供できたということは、1県全体の透析患者数の4割をお世話するという強運に恵まれて、故太田和夫教授にご指導をいただき、昭和61年に徳島県内で第一例目となる生体腎移植を当院で実施することができたことであります。ドナーもレシピエントも未だにお元気にしております。その後、今までに当院で54例の腎移植を行ってきました。ほとんどの方は透析を離れることができている生活をおくっています。また腎不全に陥ることを予防する対策として、腎生検による確定診断はきわめて重要と思いますが、当院では毎年30人前後の患者に実施しております。この検査を受けることにより、適切な治療法が選択され、なんらかの予防的役割を果たしていると思います。また糖尿病や循環器専門医も一緒に勤務するという環境も整備できました。

このように、腎疾患を一連の流れとして検査や治療に当たることは亡き太田教授の方針を踏襲していますが、多分多くの透析医も連続性のある治療を行いたいという希望を持っていると思います。しかし、そのような夢を叶えられる幸運な医者は数少ないと思っていますが、自分はその数少ない部類に属せたことをありがたく思っております。

またもう一つ感慨深いことは、終末期医療に関することでもあります。私が開業したのは昭和 51 年でしたが、その頃透析を中断して自宅で最期を迎えたいと願う高齢透析患者さんに数例遭遇しました。そのような時には、患者さんを自宅に送り届けて最期を迎えるという経験もしました。当時は患者家族との意思疎通も緊密でしたので、法律の力を借りることなく、ごく普通の日常的行為として、このような行為ができたと思っております。

また最後に、これから先の日本の医療の事を考えると不安な気持ちになります。私は先日、ドイツの保健省や疾病金庫、また色々な医療機関を訪問する機会がありました。そこで感じたことは、日本の医療はとても良くできていることと、改めて日本の医療職員の勤勉さに敬服しました。われわれの分野はいわゆる輸出産業ではありませんので、輸出することはできませんが、この日本の優れた医療保険制度や医療職員の気質などを後世に伝えながら、ぜひ世界にも広めるべきものだと思っております。

どのような経緯で私がこのような機会を頂いたのか、まったくわかりませんが、感謝しながら私の独り言を終わらせていただきます。

川島病院（徳島県）